



2017（平成29）年度中の友好都市協定の締結を目指す目黒区と金沢市は昨年、覚書に調印しました



自治体間の連携・交流を次世代に継承

目黒区は昨年10月11日、駒場に旧前田家本邸があることをはじめ歴史的につながりが深いことから、石川県金沢市と友好都市協定の締結に向けて覚書を取り交わしました。これまで区は、鎌倉時代の御家人であった「目黒氏」をルーツとする宮城県角田市や、さんま祭をきっかけとした宮城県気仙沼市と友好都市協定を結び、様々な交流を重ねてきました。これからも三都市との交流を、人と人との交流へと裾野を広げ、次世代に継承したいと考えています。

次世代への架け橋を育てる交流

旧前田家本邸が縁で文化交流

京王井の頭線の駒場東大前駅から閑静な住宅街を8分ほど歩くと、緑の森に囲まれた目黒区立駒場公園にたどり着きます。

門をくぐると、うつそうと生い茂る森林の中に気品ある木造の和館。その横には、スクラッチタイル張りの洋館が建っていますが、2018（平成30年）年9月末まで保存・整備工事を行っています。この和館と洋館及び庭園が、旧前田家本邸です。ここは、旧加賀藩主前田家の屋敷でした。昭和初期、前田家16代当主前田利為侯爵が建てたものです。この駒場本邸内にあった煎茶室は金沢市（成巽閣敷地内）に移築され

ています（非公開）。また、駒場本邸にあった襖絵などが石川県立美術館の前田育徳会尊経閣文庫分館に収蔵されるなど、目黒区と金沢市は文化的つながりがあります。

2013（平成25）年8月7日、旧前田家本邸が重要文化財の指定を受けました。また、2015（平成27）年3月14日の北陸新幹線の金沢延伸などがきっかけとなり、自治体同士の交流をさらに深めようという気運が高まりました。歴史的・文化的つながりが深いことから、両都市間の友好の絆をさらに深め、両都市間の友好推進及び魅力と活力にあふれたまちづくりを共に進めることを目的として、2016（平成28）年10月に両区市が覚書を締結。今年度内

の友好都市協定締結に向けて取り組みを進めています。

覚書調印式で青木英二区長は「目黒区は面積で言うと金沢市の30分の1しかありませんが、旧前田家本

目黒区立駒場公園にある旧前田家本邸和館



邸や目黒区美術館及び東大駒場キャンパスなど、数多くの文化財や教育施設があり、『文化の香るまち』という点で金沢市と多くの共通点があります。今後は、文化・教育の



角田市からのホームステイの子供たちを目黒区で受け入れています

みならず、産業振興や災害対策の面でも交流の発展を願っています」とあいさつしました。

この覚書を契機に、金沢市民には目黒区美術館と日本民藝館、目黒区民には金沢21世紀美術館と鈴木大拙館の入館料が減免となる相互交流キャンペーンも行われました。民間ではありませんが、かつて目黒区内を走行していた東急電鉄の車両が移籍し、現在も走っている北陸鉄道石川線の乗車キャンペーンも実施されました。

金沢市が主催し、目黒区内で開催する「かなざわ講座」は、今年3月に3回目を迎えました。「空から謡が降ってくる 加賀宝生の歴史と名品」と題して、金沢能楽美術館学芸員の山内麻衣子氏を講師に迎えて開催されました。

地球温暖化対策でエコの森

宮城県角田市は、鎌倉時代の御家人であった「目黒氏」が、武蔵国荏原郡目黒から奥州に移動したとの説があります。1982（昭和57）年に「目黒氏の子孫を訪ねて」という区制施行50周年記念事業で、目黒区

民が角田市に住んでいる目黒氏の子孫を訪ねたことが契機となり、交流が始まりました。

以来、角田市の小学生のホームステイの受け入れ、区民まつりや商店街のイベントなどでの物産販売、区内米穀店での角田産米の販売、角田市農協青年部による区立小学校での稲作指導など、様々な交流が行われてきました。そして、2008（平成20）年5月に目黒区と角田市は友好都市協定を締結しました。

角田市で開催される「阿武隈リバーサイドマラソン」には、2015（平成27）年から区民ランナーも参加。昨年は目黒区からマラソンツアーに参加した13人全員が完走を果たしました。参加者からは「もつと角田市のことを知りたくなった」「観光やマラソン大会で角田市の方々と交流することができて良かったです」と好評でした。

目黒区では、区民が角田市を訪れるだけでなく、角田市から小学生のホームステイ受け入れもしています。この事業は、1996（平成8）年からスタートしました。角田市の小学生が2泊3日の日程で、ホスト



気仙沼港からサンマを運んでくれました

ファミリーの家に滞在します。青木区長は、角田市からやってきた小学生たちに、「角田に帰ったら角田の

友だちにたくさん目黒の話をして、来年はその友だちが目黒に来るよう勧めてください。そうすることで、皆さんのような若い世代が目黒と角田の大きな架け橋になってくれると「思っています」と語りました。

角田市内の山林には「めぐろエコの森」を地球温暖化対策の一環として整備。四方山の西斜面の一角にヤマザクラが植樹されています。まだ苗木は小さいですが、これも次世代に受け継がれていくことでしょう。

気仙沼のサンマがつなげた絆

ずらりと並ぶサンマ。炭火焼きの煙が食欲をそそります。大勢の人が詰め掛け、朝から長蛇の列ができません。目黒区民まつりの一環として行われる「目黒のさんま祭」は、すっかり目黒区の風物詩となりました。

サンマは気仙沼から運ばれます。2011（平成23）年3月11日の東日本大震災で、気仙沼市は津波により甚大な被害を受け、一時は開催も危ぶまれましたが、気仙沼市民と目黒区民の懸命な尽力により開催にこぎ着けました。

目黒区と気仙沼市の交流は、

1996（平成8）年の住民同士のイベント交流をきっかけとして始まりました。その後、「目黒のさんま祭」でのサンマの提供や、災害時相互援助協定の締結、中学生の自然体験ツアーなどの交流を行ってきました。

「目黒のさんま祭」が15回目を迎えた2010年、目黒区と気仙沼市は友好都市協定を締結しました。これを機に、両自治体はさらに絆を深め、今後は防災、地域振興、産業経済、教育文化など幅広い分野にわたって末永く協力し合い、共に発展していくことを確認しました。

その絆は、東日本大震災で一層強くなったとありました。震災発災直後から目黒区の職員を現地に派遣。これまで延べ385人を派遣し、今年度も建築・土木職の職員4人を長期派遣しています。

都内でも有数の桜の名所である目黒川沿いの桜並木。2014（平成26）年3月、区は「目黒のサクラ基金」を設立し、寄付を募りました。その寄付金を活用して、桜の樹木診断や倒木の危険のある桜の伐採を行っています。そして、この基金に1万円以上寄付してくれた際の返礼

品として、老朽化のため伐採した桜の幹などを活用した「さんまペーパーナイフ」を提供しています。製作は、気仙沼市で復興支援として起業した木材加工業者の協力を得て、伐採した目黒の桜を送り、目黒区と気仙沼市の共通のモチーフであるさんまをテーマに、ペーパーナイフを手作りしています。

若い世代の交流に期待

駒場公園の旧前田家本邸、ルーツとしての目黒氏、目黒のさんま祭、これらは三都市間の交流が始まるきっかけであり大きな資源でもあります。これまでのイベントを主体とした交流から、今後は、人と人との交流へと裾野を広げる取組みが重要と考えています。

今年、友好都市協定の締結を目指す山野之義金沢市長は、覚書の調印式で、「将来的には中高生など若い世代の交流がしやすい環境を作っていききたい」と語りました。目黒区としても、文化・伝統中心の交流から住民同士や学校同士の交流に広げ、次世代へ継承していきたいと考えています。